

「移動する子ども」の私が読んだ
「移動する子ども」学

林 李早（はやし りさ、福島県在住）

モノリンガルという視点からの脱却

複言語能力というと、「日本語が話せます」「英語が話せます」のようについ捉えてしまいます。私自身も、例えば履歴書や就職面接で「(日本語以外に)英語と中国語が話せます」のように表現してきたので、何となくそれぞれの言語別の箱があって、それを詰め合わせたものが私の「言語能力」というふうに感じていました。

でも、複数言語環境で育った子どもの「ことばの力と教育」を考えると、日本語、英語、○○語...、という個別の能力の「詰め合わせ」として捉えている限り、その言語能力全体を正確に捉えることはできない、ということがこの本に書かれていました。

それぞれの言語は複雑に作用しあっていて混然一体となった状態が、複数言語環境で育った子どもの「ことばの力」であり、それはお菓子でいうところの「吹き寄せ」のようなものと言えるかもしれません。そして「吹き寄せ」の入った箱の形や大きさは、その「子ども」によって様々なのです。

既存の「物差し」を捨てなければ「ことばの力」は見えない

実は私は、幼少期を台湾で過ごしました。そこでの生活で「色々な人の日本語」に出会いました。本書で紹介されていた温又柔さんのエッセイで紹介されるような「ママ語」にも、出会いました。でも幼かった私は、「この日本語はレベル○○」のように判別する発想も手段もなく、それらを「あるがままの状態」で受け入れていました。

中学校で英語の授業が始まり、「英検」や「TOEIC」というものと出会ったことで、「○○レベルの○○語」という考え方が当たり前のものとしてしみ込んで行きました。日本で日本語で育った多くの人も、同じではないでしょうか。そういうマジョリティの社会の中で、「移動する子ども」の「ことばの力」を知り「ことばの教育」に寄与するためには、いちどその物差しを捨てなければならぬと、この本を読んで強く感じました。

「移動する子ども」が「ことばの力」を育めるように

地方都市に住んでいると、その地域から出たことのない人、という方と接する機会がたくさんあります。その人たちの社会の認識は「内・外」という土台で成り立っているように感じます。少しズームを引いて、日本全体で見ても、恐らくまだまだこの「内・外」というベースは根強く残っていると思います。それ自体が悪いということではないと思いますが、その枠組みでしか人やモノや社会を見ることができないことと、既に Superdiversity となりつつある社会全体とのギャップが大きいことに気がつけなことが問題だと思うのです。

仕事や家族の事情で、あるいは国の事情で、これから日本で生活する「移動する子ども」はどんどん増えていくでしょう。その時に、「日本＝日本語」というモノリンガルという視点だけでいでは、「ことばの力」を育める環境は育たないと思うのです。「ことばの力」を失った社会は、衰退していくに違いない。だからこそ、「移動する子ども」が安心して「ことばの力」を育んでいける環境を整えることが大切なのだ、ということを強く感じ、そんな壮大なテーマをどう自分の行動に落とし込んで行けば良いのかという課題を突き付けられた本でした。

他人の靴を履ける1冊

本書には、多くの「移動する子ども」たちの語りが出てきます。インタビュアーの素晴らしい手腕によって、様々な視点から引き出された心情、感情が散りばめられた体温を感じる「語り」ばかりです。自分自身の体験はなくとも、この「語り」を読むことで、他者の経験や感情を知るきっかけをたくさん得ることができました。まさにエンパシー、「誰かの靴を履いてみる」(ブレイディみかこ, 2021, p.90)*体験をした書籍でした。

多くの問いかけを得るとともに、私自身の過去を振り返り、台湾&日本育ちの日本語教師、というアイデンティティの再構築の機会をいただくことになった本と出会えて、とても幸せに思います。

*ブレイディみかこさんの著書『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(2021)で、息子さんが学校で「エンパシーとは？」と問われて「誰かの靴を履いてみること」と答えた、という話が紹介されています。今回感想文を書くにあたり、これ以上にぴったりの表現はないと思い、引用させていただきました。